



色彩意味論研究の 社会言語学的アプローチ

彭 国躍 (COE共同研究員 / 神奈川大学大学院・教授)



色にかかわる研究は、哲学、物理学、生理学、心理学、文化人類学、言語学などのさまざまな分野において行なわれている。言語学においては、意味論、特に色彩語彙の意味体系、概念カテゴリーの構造において大きな関心が寄せられている。ここでは主に色彩意味論研究の基本的な考え方と、筆者が社会言語学の立場から今後取りかかろうとする2つのテーマについて概説したい。

1 色彩カテゴリーの基本的な捉え方

色はわれわれの可視世界において普遍的に存在する現象である。自然言語における色の概念カテゴリーについて、基本的に実在論、認知論、唯名論という3つの見方が存在する。

実在論とは、言語は外部世界に実在する色彩カテゴリーを表すという見方である。色彩そのものを客観的、物理的な存在として捉えるニュートンの光学研究などが、このような見方を支持する。

認知論とは、言語は心的イメージとしての色彩カテゴリーを表すという見方である。色彩を心理的現象として捉えるゲーテの残像、色順応などの観察分析や、ヘルムホルツなどによる神経生理学的な研究がこのような見方を支持する。

唯名論とは、言語は色彩カテゴリーを創出するという見方である。ソシュールの構造主義における言語恣意性の研究がそれを支持する。ソシュールの言語恣意性の主張には2つの側面が含まれる。1つは音声と意味の結合関係における恣意性で、もう1つは拡散連続体としての世界に対する人間のカテゴリー自体が言語や文化によって創出されるというカテゴリー形成の恣意性である。

以上3つの見方はいずれも色彩に関する部分的真実を述べたものと言える。

20世紀に自然言語における色彩カテゴリーの研究で、最も多く引用された文献の1つとしてパーリンとケーの『Basic Color Terms』(1969)を挙げることができる。パーリンとケーは唯名論的な見方に疑問を呈し、世界の

98にわたる言語の色彩語の調査に基づいて自然言語による色彩カテゴリーのモデルを一般化した。次のような色彩語彙の配列について、パーリンとケーは、ある言語において矢印より右側のカテゴリーを持っていれば、左側のすべてのカテゴリーも必ず持つという色彩含意関係の原則を立てた。

black	< red <	yellow	< blue <	brown <	grey
white		green			orange
					purple
					pink

その後、パーリンとケーの研究手法、とくに語彙選定の基準について疑問視する声や色彩の含意階層構造に対する支持、修正または批判的な研究が多く現われた。

社会言語学の立場から見ると、色彩語、色彩カテゴリーは、単にスペクトル的に変化する物理的または心理的現象を表現するだけでなく、人間が持つさまざまな社会的、文化的属性からも大きな影響を受けることが想定される。

2 色彩語と社会的属性とのかかわり

『大辞林』によれば、日本語の「みどり」という語の意味は「青色と黄色との中間の色」を指し、「グリーン」という語彙項目では「みどりいろ」を指すと記述している。辞書の意味記述に限界があることは十分に理解できる。しかし、それにしてもこのような記述は漠然としすぎる。日本語話者にとって「グリーン」と「みどり」はどの程度の同義性を持っているか、つまり両者の彩度、明度、色相という3属性における分布状況、意味中核と意味範囲などにおいて本当にまったく同価なのだろうか。「グリーン」は「みどり」よりやや彩度が高いというようなことはあり得ないのだろうか。

外来語が日本語に入った時、外来の概念と共に入る場合と旧来の概念に対する新しい表現形態として導入される場合とがある。後者の場合、当然従来使われてきた和語や漢語との間に意味の指示範囲と使用者の社会的属性範囲において領域争いの現象が起きる。つまり「グリー

